



Title	精神の座としての〈腹〉の史的展開再考：中世以前の表現に注目して
Author(s)	後藤, 秀貴
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 51-63
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/85062">https://doi.org/10.18910/85062</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 精神の座としての〈腹〉の史的展開再考 —中世以前の表現に注目して—\*

博士後期課程3年 後藤 秀貴

## 1 はじめに

本稿は、筆者がこれまでに行った日本語の〈腹〉の比喩的理解に関する史的研究の不足を補填することを目的としている。<sup>1</sup> 後藤 (2019) では、『日本国語大辞典 第二版』(以下、『日国』)の子見出しに記載された「はら(腹/肚)」およびその関連語の慣用表現の初出を観察することで、精神作用の座としての〈腹〉の意味拡張の傾向を把握した。しかし、その調査はあくまで辞書項目としての限られた慣用表現を対象としており、〈腹〉の意味拡張を捉えるための資料としては不十分であった。本稿では、中世以前の漢語表現を中心に、後藤 (2019) での観察対象から漏れていたその他の〈腹〉表現を扱うとともに、データベース中の〈腹〉表現の調査結果を報告をすることで、〈腹〉の意味拡張に関する記述・説明を精緻化する。

構成は次の通りである。第2節で後藤 (2019) の問題点の指摘、課題提起をしたのち、第3節では本研究で使用するデータベースを紹介する。第4節では、後藤 (2019) の観察から漏れていた『日国』の〈腹〉表現のうち、中世以前の漢語表現に焦点を当てて初出例の出典と用例の意味特徴を明らかにする。第5節では、「日本古典文学大系本文データベース」から得られた中世以前の〈腹〉表現を観察することで、辞書情報に基づく調査の妥当性を検証する。第6節では、本研究の結論と今後の課題を述べる。

## 2 後藤 (2019) の問題点と本研究の課題

後藤 (2019) では、『日国』の「はら(腹/肚)」およびその関連語の見出し中に含まれた慣用表現(子見出しとしてあげられているもの)の初出を観察することで、精神の座としての日本語の〈腹〉の意味の史的展開を考察した。調査結果として、〈腹〉については中古・中世における怒り、不満、可笑しさ、性向、玩味といった限られた精神作用に関する表現に始まり、近世以降、度量、理解・納得、考え・意図、覚悟・決心等の精神作用を表す表現が出現することで、現代に通じる意味の成熟を迎えたことを指摘した。その上で、認知意味論的立場から、〈腹〉のメタファー的理解の史的展開を【表1】のように整理した。

表1. 〈腹〉のメタファーの史的展開 ([後藤 2019: 29] を一部変更)<sup>2</sup>

ソース		ターゲット				例
		中古 (794-1191)	中世 (1192-1602)	近世 (1603-1867)	近代 (1868-1944)	
容器	内容物の増量 (乱れ)・制御	不満		怒り		腹が張れる、腹に据えかねる、腹が煮える
	内容物の存在・保持			考え・意図		腹の中、腹に一物
	内容物の探索・露呈			考え・意図		腹を探る、腹を割る
	対象の受け容れ			理解・納得		腹へ落ちる、腹に入れる
	受け容れた対象を味わう	玩味				腹に味わう
	容器の大きさ			度量		腹が小さい、腹が太い
	内容物の性質	性向				腹汚い、腹黒い
	内容物を好む			性向		腹に惚れる
具象物	動揺・安定	怒り		覚悟(度胸) 決心		腹を立てる、腹を据える、腹を決める
	不調・回復	怒り				腹悪し、腹を癒す
	固さ			決心		腹が堅い
	完成			決心		腹が出来る

\* 本稿の執筆にあたり、渡辺秀樹先生、大森文子先生から草稿に対するご助言を頂いた。ここに感謝申し上げる。また、漢籍の用例の意味解釈に際してご助言くださった王周明先生、陳栩氏にもお礼申し上げます。

<sup>1</sup> 本稿では、いわゆる現代日本語の「はら」が指示対象とする胴の下半部およびその概念を指して〈腹〉と表記する。

<sup>2</sup> 大森文子先生から表の分類項目・体裁に関するご助言を賜った。また、本稿での上代～近代の時代区分は【表1】に従う。

しかし、後藤 (2019) での観察対象は「はら (腹/肚)」「おなか (御中)」「はて」の見出し中にある精神作用を表す慣用表現 (子見出し) のみであり、『日国』中の〈腹〉表現を網羅したわけではない。<sup>3</sup> 特に漢語の選定にあたっては、『現代語古語類語辞典』をもとに限られた語を調査しており (「腹部」「腹腔」。いずれも比喩表現の項目は得られなかった)、「心腹」のように〈腹〉以外に関する構成要素を語の内部に含む項目については観察対象としていない。また、先述の通り、そもそも後藤 (2019) の調査はあくまで辞書項目に依拠したものであるため、〈腹〉の意味拡張の全体像を捉える資料としては不確実である。事実、長谷川ほか (2005) は、江戸中期～後期の浄瑠璃、歌舞伎、草双子から収集した「腹」表現を豊富に紹介しているが、以下に例をあげるように、その中には『日国』に記載のない表現もみられる。<sup>4</sup> このことは、中世以前の〈腹〉表現についても、辞書情報に限らず実例を幅広く観察していく必要があることを示唆しているであろう。

- (1) 【怒り】ごうせいばら／ごせ腹・ごせつ腹 【感情制御】はらをねかせて 【可笑しさ】はらをだく 【納得】はらががてんしない ([長谷川ほか 2005] より抜粋)

以上より、本研究では〈腹〉表現が成熟を迎える近世前の時代に焦点を当て、後藤 (2019) で指摘した中世までの〈腹〉表現の特徴について再検討する。具体的なリサーチクエスチョンは次の2点である。

- 〈腹〉に関して漢語表現を観察対象に含めた場合、和語中心の意味拡張と同様の傾向が見られるか。もし異なる場合、それはどのような特徴であるか。
- 後藤 (2019) において、『日国』の調査に基づき明らかにした〈腹〉の意味拡張の傾向は、中世以前の〈腹〉表現の用例を広く観察した場合に適切な説明として維持されるか。

### 3 調査方法：本研究で使用するデータベース、出典について

初めに、本研究で使用した Web 上のデータベースをまとめておく。用例を引用したデータベースについては略称を設け、括弧内で示した。

表 2. 使用データベース

データベース名	説明・備考
JapanKnowledge Lib	『岩波 世界人名大辞典』『日本国語大辞典 第二版』『例文 仏教語大辞典』の調査・引用に使用。
「古記録フルテキストデータベース」(「古記録デ」) 東京大学史料編纂所	『大日本古記録』(東京大学史料編纂所) を対象とした古記録のデータベース (ただし、『大日本古記録』以外の古記録・日記類や歴史書・年代記もまとめて処理可能とのこと)。中古～中世の公家日記、武士日記。
「古文書フルテキストデータベース」(「古文書デ」) 東京大学史料編纂所	『大日本古文書 家わけ文書』(東京大学史料編纂所) をはじめとする古代～近代 (中世中心) の古文書のデータベース。
「奈良時代古文書フルテキストデータベース」東京大学史料編纂所	『大日本古文書』編年文書 (東京大学史料編纂所) を対象とした奈良時代 (702-780) の古文書データベース。
「漢籍電子文献資料庫」(「漢資料庫」) 台湾中央研究院	史部を中心に四部 (経史子集) を幅広く含んだ漢籍データベース。2021 年 3 月時点で 1349 種以上の資料を検索可能。
「日本古典文学大系本文データベース」(「大系デ」) 人間文化研究機構国文学研究資料館	『日本古典文学大系』(岩波書店) 全 556 作品の本文データベース。文体は様々で (和文・漢文・和漢混雑文)、漢文文書については原文・訓み下し文の両方が検索対象に含まれる。

<sup>3</sup> 厳密には「腹汚い」「腹黒い」は「はら (腹・肚)」の子見出しには含まれていなかったが、筆者の判断で後藤 (2019) の観察対象として含めた。なお、「腹が黒い」も「腹黒い」とは別の項目として子見出しに含まれているが、初出は近代である。

<sup>4</sup> 筆者の勉強不足が祟り、本稿執筆時まで長谷川ほか (2005) の論文の存在を把握していなかった。同論文では「腹」「胸」さらにその他の関連部位についても近世の文学作品から表現を広く収集・分析されており、「身体義」「心理義」「人格義」の区分に基づいて各部位の特徴が論じられている。認知言語学的枠組みを採用した研究ではないものの、身体部位に関する従来の認知的分析に通じるような示唆的説明も含まれているので、参照されたい。

#### 4 『日本国語大辞典 第二版』の表現の再検討

中世以前の〈腹〉表現収集の糸口として、後藤 (2019) で扱われていない『日国』内の〈腹〉表現を抽出する。JapanKnowledge Lib の検索ツールを用いて、『日国』内の「腹」という字を含む項目を全て抽出すると、単語類、慣用句・ことわざ類を合わせて 904 件が該当する (字音音素の「ふく」1 件を除く)。このうち、(2) に示す条件を満たすものは (3)(4) の 40 項目である。<sup>5</sup>

- (2) ① 「はら (腹/肚)」の子見出しに含まれていない (後藤 (2019) で扱われていない)。  
② 精神作用に関する語積がある。  
③ ②の語積に対する中世以前の用例が記載されている。

#### (3) 中古 (794-1191) …14 項目

いい-はらだ・つ [いひ・] (言腹立) /うち-はらだ・つ (打腹立) /おおやけ-ばら [おほやけ・] (公腹) /おおやけ-はらだたし [おほやけ・] (公腹立) /おおやけ-はらた・つ [おほやけ・] (公腹立) /たち-ばら (立腹) /ないばら-を-た・つ (無腹立) /なま-はらだ・つ (生腹立) /はらだたし・い (腹立) /はらだたし-げ (腹立→) /はらたち-な・す (腹立為) /はら-だ・つ (腹立) /はら-た・てる (腹立) /ふく-りゅう [・リフ] (腹立)

#### 中世 (1192-1602) …11 項目

けら 腹 (はら) =立 (た) つれば [=立 (た) てば] 鶯 (つぐみ・つむぎ) 喜 (よろこ) ぶ/そらばら を立 (た) つ/たて-はら (立腹) /なま-はらだたし (生腹立) /ねはら を立 (た) つ/はら-こぎ (腹→) /はら-だち (腹立) /はら-たて (腹立) /まけばら を=立 (た) てる [=立 (た) つ] /むか-ばら (向腹) /りっ-ぷく (立腹)

#### (4) 上代 (-793) …2 項目

【本心】しん-ぷく (心腹) /ふく-しん (腹心)

#### 中古 (794-1191) …4 項目

【不満】いわ=ぬは [=ねば] 腹 (はら) ふくる/おぼしき 事 (こと) 言 (い) わねば腹 (はら) ふくる 【性向】はら-ぐる (腹黒) 【可笑しさ】せっ-ぷく (切腹)

#### 中世 (1192-1602) …9 項目

【本心】こころ を人 (ひと) の腹 (はら) に置 (お) く<sup>6</sup>/ふく-ぞう [・ザウ] (腹蔵・覆蔵) /ふくぞう 無 (な) い 【本心・度量】ふく-ちゅう (腹中) 【憂い・悩み】ふくしん=の 病 (やまい) [=の患 (わずら) い・=にある病 (やまい)]<sup>7</sup> 【性向】なま-はらぎたな・し (生腹汚) /こうしの 腹黒 (はらぐる) 【可笑しさ】はらすじ 痛 (いた) し/ほう-ふく (捧腹・抱 (ハ) 腹)

(3) にまとめた通り、40 項目中 25 項目が【怒り】に関する表現であり、「腹を立つ」の派生形をはじめとして多様な表現が見られる。(4) ではその他の精神作用に関する表現 15 項目をまとめている。怒り表現と同様に、後藤 (2019) で扱った表現と関連するものが含まれる一方で (e.g. 「言わぬは腹ふくる」←「腹が脹れる」、「切腹」←「腹を切る」、「生腹汚し」←「腹汚し」)、漢語あるいは漢語の訓み下しに基づいた表現も存在する。なお、このほかに「傍痛い」の同音として「片腹」が意識されて成立した「片腹痛 (かたはらいたい)」にも中古の用例が見られるが、成立の動機が異なるため、上のリストには含めていない。

さて、(4) で注目すべきは漢語の存在である。第一に、本心あるいは真心としての心のうちを表す熟字「心腹」「腹心」が既に上代から使用されている。後藤 (2019) の調査では、「腹の内 (はらのうち)」「腹の中 (はらのなか)」などの【本心】(もとは【考え・意図】)としていたが、本稿では【本心】として改める)に関する表現は、「はら」「おなか」「ほて」をたどる限り、近世以降の初出であるとの報告を行ったが、

<sup>5</sup> このほかに、後藤 (2019) でキーワードとしたものも一通り検索したが、(2) の条件を満たす追加表現が得られたものは「腹」のみであった。また、(3)(4) の表記は全て JapanKnowledge Lib 上の方式に従った。

<sup>6</sup> 『後漢書』光武帝紀・上の「蕭王推赤心置人腹中」に基づく。「蕭王」の後には「赤心 (せきしん) を推 (お) して人 (ひと) の腹中 (ふくちゅう) に置 (お) く」と訓む。『日国』によると、もとは「心から人を信じ、一点の疑心もいだかない」ことを表すが、そこから「人の心底を探り出そうとする。腹を探る」という意味へ転じた。

<sup>7</sup> 『日国』によれば、この表現 (漢語では「腹心之疾」) は本来腹や心にある重い病を指す。このような身体的な患いが、救いたい憂い・深刻な悩みといった心理的な患いの意に転じたと考えられ、(腹) に精神があるという理解様式から生まれたものとは言い難いものの、今回項目として含めた。

それよりもはるかに時代を遡っている。『大漢和辞典 修訂版』をみると、「心腹」「腹心」は身体的な意味（胸と腹）、精神的な意味（まごころ）、さらには心から親しくする・頼みにする人物という語釈と用例が載せられている。岩下（2003）によれば、「腹心」という熟字は『世説新語』を通じて日本へ入ったのだという。また、「心腹」については『漢書』（趙広漢伝）の「吏見者皆輸写心腹、無所隱匿」が有名であり、現代でも「心のうちを全て打ち明ける」ことを表す「輸写心腹」という四文字熟語として残っている。

『日国』では、「腹の内」に対応する「腹内（ふくない）」の精神的な意味での用例を挙げていないものの、「腹の中」に対応する「腹中（ふくちゅう）」に関しては、中世での初出例として（5）を採用している。ただし、ここでの「腹中」は【本心】ではないことに注意されたい。

- (5) きやつが腹中は廣そうな。まだ問おう。 （大系デ／大名狂言 今参）<sup>8</sup>  
[秀句好きの大名のもとに来た今参り（新しい使用人）が、繰り返しの大名の問いに秀句で巧みに応答する。それに感服した大名の台詞]

（5）の例は、『日国』に限らず「腹中」の用例として方々で引かれ、一般に【度量】という解釈が与えられているが、文脈的には次々と秀句を述べる今参の文学的才識の豊かさを指しているとも考えられよう。<sup>9</sup>この件について直接論じた研究は筆者の知り得る限りでは存在しないが、下房（1987）では「懐狭し（ふところせばし）」について「他の文献では管見に入らないが、思慮が浅く、才知に欠けることを言うのであろう。」（p. 81）と述べた上で、対義表現として上の「腹中広し」の例を挙げている。なお、この「腹中広し」という表現の用例は似た文脈を持つ狂言の別作品でも見つかる。<sup>10</sup>

- (6) さて、汝が腹中は廣そうな。また某も、いかほど言うても盡くすることではない。  
（大系デ／大名狂言 富士松）  
[太郎冠者（使用人）が旅先で得てきた富士松をめぐって主人と連歌の付合を行うことになったが、太郎冠者はどんな句にも見事に付句する。最終的に富士松を諦めた場面での主人の台詞]

いずれにせよ、〈腹〉の規模は、【度量】の象徴として近世以降の「大腹中（だいふくちゅう）」「小腹中（しょうふくちゅう）」という表現や、「腹が小さい」「腹が太い」といった「はら」表現の中で言及されることとなる。上記の「腹中広し」をそれらと並行的に捉えて【度量】として解釈するのであれば、中世での先行例として位置付けられるだろう。

「腹の中」のように、【本心】としての「腹中」の用例は中世では見られないのであろうか。『日国』からは中世の用例を得られないが、「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」での「腹中」の文字列検索の限りでは、執筆年月日が判明している資料のうち、最も古いもので1557年の用例が見つかる。<sup>11</sup>

- (7) 連々申度、今度之次に申にて候申にて候、是より外に、我々腹中、何にても候へ、候はず候、たゝ是まで候是まで候  
（古文書デ／毛利 405 弘治三年十一月廿五日）

<sup>8</sup> 『日本古典文学大系』では旧字体漢字が使用されている。本稿でも、変換不可能な場合を除き引用の際は新字体に改めることはしない。また、（5）について『日本古典文学大系』（小山、1960）では江戸中期の大蔵虎寛本を経て来た大蔵流山本東の書写本（幕末～近代初期書写といわれる）を採用したとあるが、『日国』の同じ用例の出典は近世初期に書写されたといわれる大蔵虎明本である。

<sup>9</sup> 関係するかどうかは定かではないが、歌の心を心の中でじっくり味わうことを「腹に味わう」と述べた以下の例もある。〈腹〉は文学的感性を司る部位としての認識があったのかもしれない。

(1) この歌はあるが中におもしろければ、心とぞめてよまず、腹にあちはひて （大系デ／伊勢物語 四四）

<sup>10</sup> こちらも山本東本を底本とする『日本古典文学大系』からの引用であるが、（5）の場合とは異なり、大蔵虎明本の同曲（大塚、2006）を確認すると同じ台詞はない。さらに、大蔵虎寛本の同曲（笹野、1942）でもこれに相当するような台詞は確認されなかった。

<sup>11</sup> 古文書・古記録の用例では、資料群名・文書番号（ある場合）・和暦年月日をデータベースの情報をもとに順に示す。（7）と同じ用例は『時代別国語大辞典 室町時代編』の「腹中」の見出しでも挙げられている。また、同書では、これよりもさらに遡る『応永二十七年本論語抄』（1420年書写）からの用例が挙げられているが、少し【本心】の意味からは離れる。

(2) 我徳ハヒキウシテ腹中ガミユルホドニ、一分ノ徳ガアラハレルヲミテ、我ヲ孔子ニマサレリト云

[毛利元就が3人の子ども(隆元、隆景、元春)に当てた書状。家を保つことの重要性と心得を十四箇条に渡って述べるうちの最終条。]

最後に、扱いが最も難しいのが「心のうちにひめ隠す」ことを表す「腹蔵(ふくぞう)」である。『日国』では、「ふく」に「腹」と「覆」の2種類の字を充てており、筆者の昔見では、その他一部の辞書でも同様の扱いをしている(『大辞林 第四版』『広辞苑 第六版』)。「覆蔵(ふくぞう)」(あるいは「ふぞう」とも)はもとは仏教用語でもあり、『例文 仏教語大辞典』では、「1 覆いかくすこと。2 自分の罪を隠すこと。3. 《梵 parivāsa の訳。波利婆沙と音写》僧残罪を犯しながら、隠蔽し否認したとき、その隠していた日数に応じて、他の僧と別居させられ、会話など一切禁じられるもの。」とある。『日国』での「ふくぞう」の精神に関する語釈、すなわち「心の内にひめ隠すこと。心に思っていることをつつみ隠して外に現わさないこと。」の初出は「覆蔵」の用例であり、道元(1200-1253)の『正法眼蔵』から引かれている。<sup>12</sup>

- (8) 脱體の行履、その正當覆蔵のとき、自己にも覆蔵し、他人にも覆蔵す。(大系デ/正法眼蔵 仏性)  
訳:「煩惱を脱しようとする身が、まさにその煩惱を隠しこむとき、己にも隠しこみ、他人にも隠しこむのである。」(石井 2013, 87)

一方の「腹蔵」は、『日国』での「ふくぞう」の語釈の一つ目「胎内。腹部」として鎌倉時代の寺誌から用例が挙げられており(9)、「腹蔵」の字の精神的意味での使用の初出は、子見出しの「ふくぞう無し」にて中世末(1585年)の武士日記から引かれている((10))。さらに、「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」を調べると、(10)の用例から半世紀弱遡った(11)の用例も見つかる。

- (9) 奉納舍利二粒於大仏御腹蔵 (東大寺統要録 供養篇本)  
(10) 被失面目候てか可然候すらんと存候歟、無腹蔵申上候 (古記録デ/上井覚兼日記 天正一三年八月九日)  
(11) 少事モ不審、互ニ無腹蔵可申頭候 (古文書デ/相良 333 天文八年十月廿六日)  
[薩州家(島津氏の分家)が天草氏との抗争を解消、和解した際に残した起請文。相良家が仲介役。]

ここで問題となるのは、精神的な意味での「腹蔵」について、漢籍中の用例を十分に認めることができないという点である。『大漢和辞典 修訂版』では、「覆」「腹」の親字ごとに「覆蔵」「腹蔵」の熟語を載せているが、用例が挙げられているのは「覆蔵」のみであり(『角川大辞源』『大漢語林』も同様)、「腹蔵」については「→覆蔵に同じ」とのみある。そこで、漢籍のデータベースである「漢籍電子文献資料庫」を用いて「腹蔵」の文字列を検索したところ、44件の結果を得られたが(「覆蔵」は3244件)、用例を確認する限り、精神的な意味での用例として解釈されるのは(12)の1件のみであった。<sup>13</sup>

<sup>12</sup> この引用部については、訳書・注釈書の間で解釈にかなりの幅が見られることを断っておかなければならない。石井(2013)の訳では「煩惱を隠しこむ」とあり、一見『日国』の語釈に当てはまりそうだが、この直前をみると、「この故犯すなはち脱體の行履を覆蔵せるならん」(このあえて犯すことが、そのまま、身体を脱落した行住坐臥を覆み蔵めているはずなのです [矢島 2009: 20])とある。従って、ここで覆蔵されるのは「脱體(完全な解脱)の行履(行住坐臥)」であり、まさにその状態の時に「自分」にも「他人」にも覆み蔵められた状態(自他を超越した状態)であると述べられているのであって、自己が意図的に何かを隠蔽する・しないという意味で「覆蔵」を用いているとは言い難い。西尾ほか(1965)の注釈では、この箇所について、「この脱體の行履は、自己の内容であり、また他人の内容でもある。」(p. 141)という訳を与えている。いずれにせよ、(10)(11)でみるような単なる【本心】としての解釈は通じない。

<sup>13</sup> 筆者の勉強不足により、(12)については確証的な意味の把握に至っていないものの、現段階での解釈を述べておきたい。出典の「性法自然論(6C、朱世卿)は仏教の因果応報説に対し、物事にはすべて自ずと定まった本性があることを主張した文書である(『岩波 世界人名大辞典』)。引用部は、「至有腹蔵孟門之險」と「心庫豺虺之毒」に分節されるであろう。前半の「腹蔵」の後に続く「孟門」は中国河南省の山道のことかと考えられるが、前野(2000)によれば、この「孟門」は古くから隘路として有名だったようである。唐代の詩人崔顥の作品に「孟門行」という詩があるが、前野(2000: 175)には、「詩の内容は、孟門という地名と直接の関係はない。ただ世の人情のけわしいこと、世わたりのむつかしいことを歎いているので、それを孟門の難路になぞらえる心を含めたのであろう」とある。このように、「孟門」という地名を用いた喩えが別にもあることを考慮するに、(12)の「孟門之險」では、その隘路から連想される心情あるいは性向などの精神的な事柄が述べられており、それが腹(心中)にあると解釈することができる。後半部の「心庫豺虺之毒」で山犬やマムシの毒が心にあると述べられているが、こちらも前半分と並行して考えれば、「毒」は邪な精神を指しているに違いない。

- (12) 至有腹藏孟門之險心庫豺虺之毒 (漢資料庫／大正新脩大藏經 第五十二冊 史傳部四 二一〇三 廣弘明集三十卷 卷二十二 法義篇第四之五 齊沈約立佛法義論五首 陳沙門真觀因緣無性論并朱世卿自然論 朱世卿性法自然論)

(12) のような用例が存在することは確かであるが、「覆藏」と比較しても漢籍での「腹藏」の用例数は圧倒的に少ない。従って、日本での「腹藏」の精神的な文脈での使用が漢籍からの借用によるとは直ちに結論づけ難いだろう。また、『日国』によると「ふくぞう」は『日葡辞書』(1603-4)、『文明峰節用集』(室町中)、「ふくぞう無し」は『和漢音積書言字考合類大節用集』(1717)、『和英語林集成(再販)』(1872)、『言海』(1889)に記載があるが、葡語で書かれた『日葡辞書』を除き、いずれも「覆藏」「無覆藏」の表記となっており、「覆」の使用が規範であったことがわかる。以上を考慮するに、元々「心のうちに秘め隠す」という意味で使われていたのはやはり「覆藏」の方であり、「胎内、腹部」を指して用いられていた「腹藏」が「覆藏」の異体として流用されるに至ったという仮説を導くことができる。その最大の要因は両者の音の一致であろうが、同時に、精神の在り処としての〈腹〉の理解が動機として働いたことが想定される。もしこれが正しければ、「腹藏」は近世以降に多く追加された「腹の内」「腹に一物」「腹を探る」などの容器メタファー表現の先駆けとなる表現として位置づけられる。<sup>14</sup>

もっとも、「覆藏」は本来動詞的に(行為を表す語として)使用されるはずの熟字であり、一方の「腹藏」は、元々「腹の中」を指す名詞的熟字(事物を指示する語)として使用されていた様子がうかがえる。このように、両者の間には本来品詞的なずれもあったようで、「覆藏」の異体字として「腹藏」が用いられるようになるには、この隔たりが埋められる過程が存在したと考えられる。現段階では、以下2つの可能性を想定している。一つは、「無覆藏」(「ふくぞう無し」)のように、「覆藏」が「隠すこと」のみならず「隠されたもの」としても解釈可能な文脈で使用される段階を経ることで、「腹藏」に置き換わった可能性、もう一つは、「腹藏」の「藏」が「隠す・収める」という動詞的意味を表す構成要素として改めて解釈されることで、「覆藏」に近づいた可能性である。今後、「覆藏」と「腹藏」の関係性を精査するに当たっては、これらが文中でどのような要素として生起していたかについて注目していきたい。

## 5 「日本古典文学大系本文データベース」に基づく〈腹〉表現の調査

### 5.1 課題提起、調査方法

前節では、後藤(2019)での観察から漏れていた『日国』内の表現を手がかりに、中世以前の〈腹〉表現を漢語を中心に検討した。特に【本心】の在り処としての〈腹〉表現は、漢語の用例を含めた場合に時代を遡ることができることを見た。ここで2つの疑問が残る。第一に、前節で取り上げた漢語表現は(変体)漢文中の用例が中心であったが、中古末期から現れ始める和漢混淆文、あるいはそれ以前の一部の和文資料の中では、これらの漢語表現はどの程度使用されていたのだろうか。また、漢語の使用に関わらず、現代の辞書からは得られない〈腹〉表現はどの程度存在するのかということである。特に第一の問いは、〈腹〉の比喻表現の歴史的な意味展開を記述する際の漢語の扱いを考える上で重要となる。

以上の問いをもとに、本節では「日本古典文学大系本文データベース」の中世以前の〈腹〉表現の用例を収集・観察することで、〈腹〉表現の使用状況を全体的に再検討する。今回の調査では、「腹」に加え、「はら」と訓む(訓まれていた)その他の字「肚」「胎」「胞」を『日国』から抜粋し、調査対象とした。<sup>15</sup> 当然のことながら、これらはそれぞれ「はら」とは別の音訓を併せ持つが、【表3】では全ての検索結果を

「腹藏」の用例44件の確認にあたり、陳栩氏のご協力を得た。また(12)については、陳栩氏に加え、渡辺秀樹先生を通じて王周明先生から解釈の手がかりをご教授いただいた。

ちなみに、「漢籍電子文献資料庫」での「藏腹」の文字列検索結果は6件である。(12)と同様に精神的な意味に関するものと見込まれる表現も確認しているが、確証的な解釈に至っていないため、稿を改めて報告したい。

<sup>14</sup> この辺りの議論の組み立て方は、渡辺秀樹先生からいただいたご助言に基づいている。

<sup>15</sup> 和語と漢語の対応が安定していなかった時期のものを合わせると、『日国』では「腹」以外に次の12種の「はら」の表記が報告されている。今回、筆者の判断で主要と考えられる「肚」「胎」「胞」を抜粋したことをご了承いただきたい。

【畏・威・洩・隈】色葉・名義 【肚・腸】名義・和玉 【胎・陰】色葉 【胞・腸】名義 【臉・靨】和玉  
なお、〈腹〉表現としてどこまでを一括して論じるかについてはいまだに解決しない問題である。最終的に「腸(はらわた)」「肝(きも)」などの内臓を指す語も並行して調査することで、〈腹〉の一部として総合的に議論していく必要があることは確かである。今後の課題としたい。

記載している。これらの漢字については、精神的な意味での用例についてのみその読みを確認する方針としたが、結果的に「肚」の6件のみが対象となった。また、仮名表記として「はら」「ばら」「ばら」「ふく」「ぶく」「ぶく」をそれぞれ検索したが、本データベースはアノテーション処理されたものではないため、「はら(原)」「はらう(払う/祓う)」など、その他多くの語が紛れ込んでいる。「腹」として使用されているかどうかは手作業で確認した。このほかに、後藤(2019)で扱った「おなか」「ほて」「ぼんぼん」「肝の束」についても一通り調査を終えているが、本稿では【表3】の文字(列)の調査結果のみを報告する。

結果報告に移る前に、その他の細かな留意点を挙げておく。第一に、本データベースの検索は本文の行単位による結果となるようである。従って、ごく稀に同一行に当該文字列が複数生起している場合があるが、それは1件として処理される。反対に文字列が2行にまたがる場合、例えば「は《改行》ら」は、2件としてカウントされる。また、検索結果の本文はKWIC(Key Word In Context)形式で表示されるが、得られる文脈は原則20文字であることがわかった。それゆえ、本文元の『日本古典文学大系』にて、稀に同一行の離れた位置に同じ検索文字列が生起している事例については、検索結果から漏れてしまう場合があるようである。従って、【表3】の「検索結果件数」は参考値として考えていただきたい。今回、本文の確認中で気づいたものについては、追加データとして補った。

表3. 「日本古典文学大系本文データベース」中の〈腹〉表現

検索文字(列)	検索結果件数	精神的意味の用例数(中世まで)	備考
腹	3098	488	一部「おなか」(お腹)を含む。「はらわた」(腹のわた、腹腸、腹わた、腹綿)5件は除外。
肚	18	6	精神的意味での用例のうち、「はら」と読むものは中世以前はなく、「むらとのうち」(肚裏)、「たいと」(大肚)のみ。
胎	253	0	おもに出産に関する文脈あるいは「胎蔵界」等仏教用語での生起。
胞	158	0	「同胞(はらから/どうほう)」類の表現が大半を占める。
はら	3651	42	「はらはた(はらわた)」1件は除外。
ばら	1271	1	
ばら	70	0	「ほてっばら」などの表現は近世以降。
ふく	865	0	
ぶく	176	0	
ぶく	30	0	
合計	9590	537	

## 5.2 調査結果

### 5.2.1 全体の概要

調査結果の時代ごとの内訳を【表4】に示す。各時代の収録作品数こそ異なるものの、上代での用例が最も少なく、時代を下るにつれて増加している。ここからは、上代～中世の調査結果について、後藤(2019)での『日国』の調査結果を適宜参照しつつ観察していく。

表4. 「日本古典文学大系本文データベース」中の精神作用を表す〈腹〉表現内訳

\*()内の件数は漢文の原文・訓み下しの重複を除いたもの

検索文字(列)	上代	中古	中世	合計
腹	10(6)	182(177)	296	488(479)
肚	0	6(3)	0	6(3)
はら	1	21	20	42
ばら	0	1	0	1
合計	11(7)	210(202)	316	537(525)

【表4】の集計に含めていないが、特筆すべきその他の表現

- 「鼓腹撃壤」に由来すると考えられるしぐさ表現：「腹を鼓つ」「腹壤を撃つ」等  
平和・安定を象徴するしぐさの表現として用いられる。ちなみに、近世以降は個人的な満足感を表す意味に拡張したと考えられる用例が見つかる。
- 「片腹（痛し）」  
仮名表記「かたはら」が、「傍」「片腹」いずれの意味であるかが特定し難いため、一律で除外した。ただし、『日国』によれば、笑いの意味での「片腹痛し」は笑うと脇腹が痛くなることから生じたという語源説（『和訓栞』）もあり、必ずしも全てが「傍痛し」からの派生ではないようである。この場合、「片腹」が用いられるようになった動機は、「腹が痛い」「腹が振れる」などの表現と同じ笑いに伴う身体感覚である。

## 5.2.2 上代 (-793)

上代の用例は11件中8件が漢文であり、和語の用例は周知の『古事記』歌謡「大猪子が原 大猪子が 腹（波良）にある 肝向ふ 心をだにか 相思はずあらむ」（『古事記』巻と『古事記歌謡』巻に重複収録のため、2件として計算）と、『逸文』のいわゆる因幡の白兔伝説にある(13)のみである。<sup>16</sup>ただし、(13)は『塵袋』（鎌倉中期）で引かれたものであるため、内容的に『風土記』逸文の一つであるとしても言語的には上代とは無関係である。

- (13) 實ニハ親族ノオホキヲミルニハアラス トアザケルニ、ミギハニソヘルワニ、ハラダチテ、ウサギヲトラヘテ、キモノヲハギツ。  
(大系デ/風土記逸文 因幡国)

一方の漢語については、第4節で扱った「心腹」「腹心」に加えて、以下の用例のみであった。

- (14) 犢鼻標竿日。隆腹晒\*書秋（犢鼻を竿に標ぐる日、隆が腹に書を晒す秋）（\*「晒」は「日+麗」）  
(大系デ/懷風藻 大宰大貳正四位下紀朝臣男人〔紀男人〕)
- (15) 一本云、星川王、腹悪心龜、天下著聞。不幸朕崩之後、當害皇太子。  
（一本に云はく、星川王、腹悪しく心龜きこと、天下に著れ聞えたり。不幸して朕が崩なむ後に、當に皇太子を害らむ。）  
(大系デ/日本書紀 雄略天皇二年八月)  
〔雄略天皇が星川王子の危険性について説いた遺詔〕

(14)は、『世説新語』の「排調」にある故事（晋国の郝隆が腹の中にある書物をさらすと言って、腹を日に干したという話）を引いたものである（小島, 1964）。一方、(15)の「腹悪」については、中古から和文中で用いられ始める「腹悪（はらあ）し」と形式こそ対応するが、後者が当初怒りっぽさ・短気を表す表現として使用されるのに対し、こちらは邪険であることを表しているだろう。筆者の調査の限りでは、「腹悪」という熟字は『大漢和辞典 修訂版』では見つからず、「漢籍電子文献資料庫」の文字列検索でも得られなかった。もし「腹悪」が借用によるものでないとしたら、道徳的な性向を表す「腹黒い」「腹汚い」が中古から現れるのを鑑みるに、(腹)に人格的特徴を投影する理解様式の貴重な事例とみなすことができよう。

<sup>16</sup>『日本書紀』の以下の歌にある「腹内」（「波瀧濃知（はらぬち）」）は、「腹の内」の変化形と言われている。これは、反乱を起こした忍熊王陣営の一人が、敵対する神功皇后勢の武内宿禰と建振熊を迎え討つ際に敵の武内宿禰（内の朝臣）に言及して詠った歌である。一般に、「敵の腹の中に小石（いさご）が詰まっているはずはない」と直接的に訳される当該箇所は、「矢を遮るような砂は詰っていない」と解釈されているが、この解釈に対して懐疑的な立場をとる研究も存在する。例えば、山路（1962）は「虚心にこの句を解すれば、〈腹の中には交りものがない〉ということであろう」（p. 11）「（…）六朝にわたり棟梁の臣としてお仕え申した武内宿禰の忠誠心を具体的にあらわした表現とみるのが妥当なところらしい。」（p. 12）と述べている。もし後者の解釈が通るのであれば、この例は和語による〈腹〉表現の精神的な意味での最古の用例の一つとみなされるだろう。

(3) 彼方の あらら松原 松原に 渡り行きて 槻弓に まり矢を副へ 貴人は 貴人どちや 親友はも 親友どち  
いざ鬪はな我は たまきはる 内の朝臣が 腹内は 小石あれや いざ鬪はな 我は  
(大系デ/日本書紀 神功皇后撰政元年三月・歌謡)

### 5.2.3 中古 (794-1191)

中古になると、和文中での〈腹〉表現が加わることで用例が急激に増加している。ただし、表現形式は比較的固定されており、後藤 (2019) や (3)(4) の表現リストに既に含まれているものが大半を占める。また、第4節で見た漢語表現「心腹」「腹心」はいずれも漢文中での使用にとどまっており、和漢混淆文(『今昔物語集』)でも確認されなかった。総じて、中古の資料については漢文中の〈腹〉表現と和文・和漢混淆文中の〈腹〉表現との間に互換性を見出し難く、敢えて言えば「腹立」の漢文中での使用が見られた程度であった。<sup>17</sup>

表5. 精神作用を表す〈腹〉表現内訳〔中古〕  
\*( ) 内の件数は漢文の原文・訓み下しの重複を除いたもの

意味分類	腹	はら	ばら	合計	例
怒り (の鎮静) [安定・不安定]	142	18	0	160	腹立つ、腹立たし、立ち腹、無い腹を立つ、腹居る
怒り (の鎮静) [その他]	2	0	1	3	腹 (怒りの文脈での省略)、公腹、腹止む
笑い	3	0	0	3	腹を切る、たちやすき腹
性向	22	2	0	24	腹悪し、腹汚し、腹黒し
本心・真心	9(5)	0	0	9(5)	腹心 <sup>18</sup> 、心腹
玩味	1	0	0	1	腹に味わう
不満	0	1	0	1	腹脹る
欲望	2(1)	0	0	2(1)	口腹を営む
精神	1	0	0	1	胸なし (「胸なくば」)
合計	182 (177)	21	1	204 (199)	

後藤 (2019) では扱われていない特徴的な用例をいくつか挙げておこう。

- (16) 口なくば、いづこよりか魂通はむ。腹、胸なくば、いづくにか心のあらむ。

(大系デ/宇津保物語 俊蔭)

[仲忠は、母を養うためにちょうど良い木の穴を森の中で見つけたが、そこは熊の住処であった。熊に喰われそうになった仲忠が、助けを請う場面]

- (17) 入道和ヲ出デ、傍ノ房ニ行テ居タリケルヲ、聖人腹止ニケル時ナム、入道返リ行タリケル。此ノ聖人ハ極テ立チ腹ニゾ有ケル。立腹ナル賛ニハ疾ゾ腹止ケル。(大系デ/今昔物語集 一九・一〇)

[蔵人政宗が妻の死を受けて出家した。ある日政宗が涙を流しているのを見た師である聖人が、その理由を聞いたが、期待とは異なる回答を得たために怒った。その聖人の怒り・怒りっぽさを描写する場面]

(16) は心の在り処に関する当時の認識を端的に語る重要な例であろう。仲忠は熊に喰われるのを避けようと、身体で不要な部分である耳たぶと鼻先を差し出そうとするのであるが、どうしても残したい身体部位として、魂の通る「口」と心のある「腹」「胸」を挙げている。(17) は「立」つ腹に対して「止(やむ)」を利用した例であり、当時使用されていた「居(ゐ)る」とは異なる【怒り】の鎮静である。「腹が居る」が句全体の字義的イメージを通じて比喻義を得ているのに対し、「腹止」は「腹」を【怒り】と解釈し、その怒りが「止む」と捉えた分析的な表現ではなからうか。

(18) は腹が「断」たれるという事象を通じて【感動】を表現したものであり、形式上「断腸」との関係性が伺える。堀 (2003)、長沼 (2014) の指摘するように、「断腸」は『世説新語』の故事に由来し、腸が寸断されるほどの深い悲しみを表す表現として知られているが、(18) 冒頭の「断腸」の訓読表現のように、しばしば深い感動とも結び付けられる。その後「たちやすき御腹」と続くのであるが、ここでの「たつ」

<sup>17</sup> 伊原 (1990) によれば、『小右記』長和元年 (1012年) の日記に「腹立」という文字列(「フクリュウ」と読みうる可能性のある例)が初めて現れるという。筆者の方でも「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」の漢文を確認したが、この例が「腹立」の最も古いものであった。

<sup>18</sup> 「腹臣」の意の用例を含む。

は元々腸を断つイメージがあり、「腹」と「腸」の隣接性から生じたメトニミーと考えられるだろう。このような「腹」と「腸」の置き換えは別の表現でも確認され、例えば笑い（【可笑しさ】）を表す「腹を切る」の「腹」が「腸」（腹のわた）となった「いたく笑て、とゞまらんとすれどもかなはず。腹のわた、きるゝ心ちして、死ぬべくおぼえければ」（大系／宇治拾遺物語 一四）の例が見つかる。<sup>19</sup> ただし、長沼（2014）は（18）の事例について、『日本古典文学大系』（河野, 1961）を含む多くの書が「断つ」と解釈していることを否定し、「立つ」つまり立腹の意味として捉えるべきだと述べている。この例を、【感動】に関する新たな〈腹〉表現とみなすべきかについては検討を要するだろう。

- (18) 腸の（断エ）しかば御聲の限りをこそ聞キ侍りしか。〈文字〉一も覚えぬは。すべて君は涼をぞ惑はし給フ。琴弾き給ヒては、裸鶴脛にて走らせ給ヒて殿上まで笑はせ奉り給フ」大將「たぢやすき御腹にこそあれ。今も聞い給はでは、え仕うまつらじや」（大系デ／宇津保物語 蔵開 中）  
 [親しい仲である涼と仲忠の会話。涼が仲忠の講書の声色に感動したあまり、内容を覚えていないこと、仲忠が琴を弾くにつけては、涼が美しい音色を聞きつけて見苦しい格好のまま駆けつけ、皆の笑いものになったことを述べる。それに対する仲忠の戯れの返答]

漢文についてはそもその数が少なく、主に空海（774-835）の漢詩文集『性霊集』の中での用例である。（19）の例はとりわけ創造的な比喻表現であろう。

- (19) 海中之愁。猶委胸臆。徳酒之味未飽心腹（海中之愁猶胸臆に委る。徳酒の味、未だ心腹に飽かず）  
 （大系デ／性霊集 大使の爲に福州の觀察使に與ふるの書）  
 [荒波のなか福州に辿り着いた遣唐使一行が、素性の疑いを解くために空海に執筆を依頼した書状。皇帝の徳を酒の味に喩えることで、対応を仰いでいる。]

「肚」の用例も全て『性霊集』からのものであるが、「むらとのうち」（肚裏）が2件、「たいと」（大肚）が1件であり、「はら」と読んでいるものはなかった（『日本古典文学大系』（渡邊・宮坂, 1965）の訓み下しは原則京都醍醐院所蔵本底本〔13C?〕に従ったとある。ちなみに「むらと」は腎臓の古名でもある）。いずれの用例も創造的で、単純に【表5】の分類枠には当てはめることが躊躇われるため、(20)-(22)に示すことでその代わりとする。敢えて分類するのであれば、(20)は後述の「腹黒」のように、邪な気持ちを収める部位としての〈腹〉、(21)は学識を蓄えておく部位としての〈腹〉の特徴が伺えるだろう。(22)は宗教的意味が強く、単に精神作用としての扱いはしかねるが、いずれにせよ物理的な〈腹〉の機能からは逸脱している。

- (20) 營營染白黒 讚毀織災殃 肚裏蜂蠆滿 身上虎豹莊（營營として白黒を染む 讚毀して災殃を織る 肚（むらと）の裏（うち）に蜂蠆滿てり 身の上に虎豹莊る）（大系デ／性霊集 山に遊ぶで仙を慕ふ詩）[自然描写を通じて仏教的示唆を試みた詩文。訓み下し二重下線部注釈：「蜂とさそり。心中に悪心を充満するさまを喩えていう」（渡邊・宮坂, 1965: 160）]
- (21) 山河氣。五百賢。允武允文得自天。九流三略肚裏吞。（山河の氣、五百の賢、允に武、允に文、得ること天よりす。九流三略は肚（むらと）の裏（うち）に吞めり。）[陸奥守に任ぜられた小野朝臣岑守に贈られた詩。岑守の文武両道を称賛する。訓み下し二重下線部注釈：「肚の裏に吞めり」は、わがものとしている意。」（渡邊・宮坂, 1965: 167）]
- (22) 衆與生所遍之利。情與非所在之聚。豁大肚而懷含。開鴻藏以亭毒。（衆と生との所遍の利、情と非との所在の聚、大肚（たいと）を豁（ほがらか）にして懷含し、鴻藏を開いて亭毒せむ。）（大系デ／性霊集 天長皇帝故中務卿親王の爲に田及び道場の支具を捨てて橋寺に入る願文）[訓み下し二重下線部注釈：「さとりを明らかにして」（渡邊・宮坂, 1965: 291）]

#### 5.2.4 中世 (1192-1602)

中世についても、「腹を立つ」に代表される怒り表現が中心であり、表現パターンとしても『日国』に基づく情報との大きな相違は見られなかった。また、和漢混淆文の増加に伴い、漢語による〈腹〉表現の用例が増加することが予測されたが、今回の調査では特にそのような傾向は見られず、漢文以外の作品中

<sup>19</sup> 長谷川ほか（2005）でも同様の指摘がある。

で得られた漢語表現は第4節で取り上げた「腹中広し」と、「腹心」を用いた「腹心の病」の例であった（「立腹」など和製漢語として知られるものは含めず）。

表 6. 精神作用を表す〈腹〉表現内訳〔中世〕<sup>20</sup>

意味分類	腹	はら	合計	例
怒り（の鎮静）〔安定・不安定〕	268	15	283	腹を立つ、腹立たし、腹立ち、腹を据えかねる、腹を居かねる
怒り（の鎮静）〔その他〕	3	1	4	腹に据えかねる、腹こぎ
笑い	1	0	1	腹の皮が切れる
性向	21	4	25	腹悪し、腹汚し、腹黒し、腹中広し
真心・信頼	1	0	1	心を人の腹に置く
不満	1	0	1	おぼしきこと言わぬは腹ふくる
憂い・悩み	1	0	1	腹心の病
合計	296	20	316	

既に後藤（2019）で指摘した通り、中世では、補助動詞的な「兼ねる」をつけることで、怒りに耐えきれない・怒りがおさまらないことを表す表現（「据えかねる」「居かねる」）が現れる。このうち、「据える」は目的語として「腹」をとる場合が多いが（「腹を据えかねる」）、「腹に」とすることで、〈腹〉に収められた内容物としての怒りの存在を含意する（23）のような用例もみられる。また、（24）は修飾部「一昨日の」が極めて重要な示唆を含んでいるだろう。「腹を据えかねる」は句全体の意味が怒りを表すはずであるが、「一昨日の」が修飾するのはおそらくその構成要素の「腹」であり、ここでの「腹を据えかねる」のゲシュタルト性は薄れている。（17）の「腹止」のように、「腹」が【怒り】として意識された分析的表現の一つとも考えられるだろう。

- (23) 朝比奈腹にすえかねて、熊手・薙鎌・金撮棒を、持たする中間のなきままに、閻魔王に閻魔王に、ずっしと持たせて朝比奈は、浄土へとてこそ、急ぎけれ。 （大系デ／鬼山伏狂言 朝比奈）  
 [飢餓状態の地獄を見かねた閻魔王が、地獄送りにする人間を探しにいくが、運悪く目をつけたのは武勇の朝比奈であった。閻魔王は反対に圧倒されるばかりで、とうとう浄土への道案内をするよう求められる。閻魔王がそれを断った場面]
- (24) 大津二郎家に歸りて見れば、女は一昨日の腹を据へかねて、未だ臥してぞ有（り）ける。 （大系デ／義経記 大津二郎の事）<sup>21</sup>  
 [夫の大津次郎が宿を貸した山伏が実は義経ではないかと恐れた妻が、協力して捉えてしまおうと夫に告げたとこ、余計なことをしないようにと散々痛めつけられた。その後大津次郎が一向を見届けて家に帰った場面。]

性向については、「悪し」（本調査では短気「腹悪し」も性向に分類した）、「汚し」、「黒し」といった否定的評価を含意する構成要素を持つ表現が使用されるが、徐々に性向を述べる表現から、（25）のようによこしまな考えを一時的に持つことを表す例も出てくる。

- (25) 其事はいかゞ候らん、身にをいてはま（ッ）たく御腹ぐる候はず。起請文をかき進べき  
 （大系デ／平家物語 一二・土佐房被斬）

<sup>20</sup> 注8でも述べた通り、『日本古典文学大系』の『狂言集』（『狂言集 上』『狂言集 下』）は大蔵流山本東の書写本（幕末～近代初期書写といわれる）を底本としている。【表6】の316件うち、『狂言集』からの用例は155件（【怒り】に関するもの153件、【性向】に関するもの2件）である。今後、該当箇所を大蔵虎明本などの古い資料と照合していく必要がある。なお、（23）で引いた「腹にすえかね」は、大蔵虎明本の同曲では「はらをすへかね」（大塚2006:468）、大蔵虎寛本では「腹にすゑかね」（笹野,1943:397）となっている。

<sup>21</sup> ただし、『日本古典文学大系』（岡見,1959）では近世初期（元和～寛永）の刊行といわれる「丹緑絵入の十二行木活字本義経記」（国立国会図書館支部東洋文庫蔵）を底本としたとある。底本の異なる『新編日本古典文学全集』（梶原,2000）（「田中本義経記」を採用）を見ると「一昨日の」の部分は「未だ」となっている。本調査では、用例の年代への振り分けの際、各作品の底本成立の年代までを考慮していない点が大きな問題であることを述べておかなければならない。

〔頼朝に義経の暗殺を依頼された土佐坊昌俊は上京したが、義経のもとへ挨拶へ赴かない。怪しんだ義経から呼びつけられた昌俊が、義経からの質問に対して答える場面。〕

長谷川ほか (2005) では、このような「腹黒」の使用は中世の裁判用語としてよく確認されるという指摘がある。「奈良時代古文書フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「古記録フルテキストデータベース」を検索しても、中世の例として「無腹黒由」(古文書デ/石清付 7271 元仁二年月)「向後更に不忠腹黒野心あるへからす候」(古文書デ/石清菊大 404 応安五年七月五日)などが見つかった。これらは具体的な意図を述べた表現であると考えられ、近世で現れる「腹を探る」などの表現(後藤 (2019) で【考え・意図】、本稿で【本心】と述べてきたもの)に通じるであろう。

## 6 結論

本稿では、〈腹〉表現が成熟を迎える近世前の時代に焦点を当て、後藤 (2019) で指摘した中世までの〈腹〉表現の特徴について再検討した。後藤 (2019) で扱われていない『日国』の項目を表現収集の糸口とし、実際に各種データベースから用例を収集・観察することで、以下のリサーチクエスション (RQ) に取り組んだ。

- 〈腹〉に関して漢語表現を観察対象に含めた場合、和語中心の意味拡張と同様の傾向が見られるか。もし異なる場合、それはどのような特徴であるか。
- 後藤 (2019) において、『日国』の調査に基づき明らかにした〈腹〉の意味拡張の傾向は、中世以前の〈腹〉表現の用例を広く観察した場合に適切な説明として維持されるか。

第4節で挙げた漢語表現「心腹」「腹心」「腹中」「腹蔵」はいずれも中世までに現れ、後藤 (2019) で述べた感情・性向中心の中世以前の〈腹〉表現とは異なる意味を実現している。これらは広くいえば、全て【本心】の座としての〈腹〉の理解に通じており、特に後者2つについては、近世以降の容器メタファー表現 (e.g. 「腹の中」「腹に一物」「腹を探る」) に見られるような〈内容物〉—〈本心〉と〈容器〉—〈腹〉の対応関係を前提としている。漢語表現を視野に入れた場合、精神作用の座としての〈腹〉の史的展開は後藤 (2019) で結論づけたものよりも時代を遡ることができるだろう (一つ目の RQ に対する結論)。しかしながら、第5節での「日本古典文学大系本文データベース」の調査結果が示すように、これらの漢語表現が中世までに文体関係なく浸透していたわけではない。つまり、これらが近世以降の和語による【本心】表現の代わりを担っていたとまでは直ちに言い切れない。少なくとも中世以前の和文・和漢混淆文において、〈腹〉表現は、【怒り】を中心に独自に発達した和語表現が用いられており、かつ、後藤 (2019) で述べたように近世以降よりも狭い範囲の精神作用を表していたと考えられる。精神作用の座としての〈腹〉の理解を考える上では、漢語の影響を十分に認めつつも、漢語表現と和語表現に一定の線引きをした上で扱うべきであるといえるだろう。その場合に限り、後藤 (2019) での『日国』に基づく結論は、中世以前の〈腹〉表現の特徴を捉える説明として一定の妥当性が保たれる (二つ目の RQ に対する結論)。ただし、第4節の「腹蔵」の議論、第5節での「腹黒」の用例の観察からわかるように、一部の表現では近世以降に現れる表現と理解様式のレベルで結び付けられる用例がみつかると。このような個別の用例をさらに収集・観察していくことで、理解 (概念) レベルでの「精神の座としての〈腹〉」の展開はさらに時代を遡って記述できると考えられる。

今後の課題として、「きも」「はらわた」等の内臓を含めた調査を進めることで、〈腹〉の理解を総合的に考えていく必要がある。五蔵思想によって、内臓に関する漢語の表現形式・意味は複雑かつ精緻であり、その日本語への影響は外の身体部位としての「はら」よりも大きいと考えられる。事実、今回の調査中にも内臓表現の用例が頻繁に確認された。内臓に関する表現の調査結果は別の機会に改めて報告したい。また、第5節での調査の方法論的限界として、注21でも触れた底本の成立年の問題がある。用例を引く際の諸本の比較を引き続き実施していきたい。

## 参考文献

- 道元 (著)、石井恭二 (訳) (2013). 『現代文訳正法眼蔵』. 河出書房新社.
- 後藤秀貴 (2019). 「精神の座としての〈腹〉—身体部位詞の通時的観察と認知言語学的分析—」. 『言語文化共同研究プロジェクト 2018 レトリックとコミュニケーション』, 23–35. 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 長谷川雅雄、ペトロ・クネヒト、美濃部重克、辻本裕成 (2005). 「“虫”の居所—“腹”と“胸”をめぐる— (上)」. 『アカデミア 人文・社会科学編』, 80, 49–102. 南山大学.
- 堀誠 (2003). 「道真断腸詩篇考」. 『中国文学研究』, 29, 199–210. 早稲田大学中国文学会.
- 伊原信一 (1990). 「和製漢語「腹立 (フクリフ)」の語史—腹立から立腹へ—」. 『国語国文学研究』, 26, 1–12. 熊本大学文学部国語国文学会.
- 岩下隆 (2003). 「中国語 (漢語) から借用した日本語」. 『清泉学院短期大学研究紀要』, 22, 97–113. 清泉学院短期大学.
- 梶原正昭 (校注・訳) (2000). 『義経記』 (新編日本古典文学全集 62). 岩波書店.
- 鎌田正、米山寅太郎 (1992). 『大漢語林』. 大修館書店.
- 小島憲之 (校注) (1964). 『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』 (日本古典文学大系 69). 岩波書店.
- 河野多麻 (校注) (1961). 『宇津保物語 2』 (日本古典文学大系 11). 岩波書店.
- 小山弘志 (校注) (1960). 『狂言集 上』 (日本古典文学大系 42). 岩波書店.
- 小山弘志 (校注) (1961). 『狂言集 下』 (日本古典文学大系 43). 岩波書店.
- 前野直彬 (注解) (2000). 『唐詩選 (上)』. 岩波書店.
- 松村明、三省堂編修所 (編) (2019). 『大辞林 第四版』. 三省堂.
- 諸橋轍次 (1984–1986). 『大漢和辞典 修訂版』. 大修館書店.
- 室町時代語辞典編修委員会 (編) (2000). 『時代別国語大辞典 室町時代編四』. 三省堂.
- 長沼英二 (2014). 「和語成句の和語成句の漢訳表現—「はらをきる」と「断腸」—」. 『表現研究』, 100, 40–49. 表現学会.
- 中田祝夫 (編) (1976). 『応永二十七年本論語抄: 東山御文庫蔵称光天皇宸翰』. 勉誠社.
- 西尾実、鏡島元隆、酒井得元、水野弥穂子 (校注) (1965). 『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』 (日本古典文学大系 81). 岩波書店.
- 岡見正雄 (校注) (1959). 『義経記』 (日本古典文学大系 37). 岩波書店.
- 大塚光信 (編) (2006). 『大蔵虎明能狂言集 翻刻註解 上巻』. 清文堂.
- 尾崎雄二郎、都留春雄、西岡弘、山田勝美、山田俊雄 (編) (1992). 『角川大宇源』. 角川書店.
- 笹野堅 (校訂) (1942). 『大蔵虎寛本能狂言 上』. 岩波書店.
- 笹野堅 (校訂) (1943). 『大蔵虎寛本能狂言 中』. 岩波書店.
- 芹生公男 (編) (2015). 『現代語古語類語辞典』. 三省堂.
- 下房俊一 (1987). 「注解「七十一番職人歌合」稿 (2)」. 『島根大学法文学部紀要 文学科編』, 10(1), 65–101. 島根大学法文学部.
- 新村出 (編) (2008). 『広辞苑 第六版』. 岩波書店.
- 矢島忠夫 (2009). 「正法眼蔵『仏性』(下)」. 『弘前大学教育学部紀要』, 102, 9–23. 弘前大学教育学部.
- 山路平四郎 (1962). 「忍熊王物語の「熊之凝」の歌」. 『国文学研究』, 25, 9–16. 早稲田大学国文学会.
- 渡邊照宏、宮坂宥勝 (校注) (1965). 『三教指帰 性霊集』 (日本古典文学大系 71). 岩波書店.

## データベース

- JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/>) 『岩波 世界人名大辞典』 『日本国語大辞典 第二版』 『例文 仏教語大辞典』
- 人間文化研究機構国文学研究資料館 「日本古典文学大系本文データベース」 (<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>)
- 台湾中央研究院「漢籍電子文献資料庫」 (<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>) (2021/3/21 最終アクセス)
- 東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」 (<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>) (2021/3/21 最終アクセス)